

## 追悼文

2022年7月16日(土) 中澤健さんが天国へ旅立たれました。

中澤さんは、平成元年のグループホーム制度創設に、当時は厚生省障害福祉専門官として障害福祉課長浅野史郎さんと共にご尽力された方です。

昨年開催した第17回日本グループホーム学会全国大会(オンライン)でもお話しをいただいたばかりでした。

本人さんとのオンラインによる座談会で、「健さん、どうしてグループホーム制度をつくらうと思ったんですか? どうしてグループホームを普通の暮らしにしようと考えたんですか?」に次のように答えられています。

『グループホーム制度創設の一番の願いは、地域生活の実現ということだったんです。地域生活とは何か。それは昼間の仕事から戻ってきてくつろげる場所。グループホームという時の「ホーム」、「ホーム」というのは「家」ですけれども、この「ホーム」をつくりたかったわけです。その人の暮らしの拠点、本拠地づくりがしたかったということです。(中略)制度開始と同時に「赤本」と呼ばれる「グループホームの設置・運営ハンドブック」(監修厚生省児童家庭局障害福祉課)を出版しました。厚生省の障害福祉課が監修し責任をもってまとめた本であることをはっきりさせるために局長と障害課長があいさつで、これからは地域生活が大事だということをこの本で述べています。「グループホームの設置・運営マニュアル」の項の「グループホームの基本的性格」には、入所施設で集団の暮らしをするのではなくて、町の中で個人生活を実現するという願いが貫かれて書かれています。

ですから、人数ははっきり1つのグループホームは標準が4、5人。多くても7人までとはっきり書いてあるんですね。グループホームはくつろげる場所。原則は一人ひとり個室で、自分の好きにできる代わりに責任も伴います。世話人さんも含めて5、6人が仲良く暮らせられるように努力することも必要です。世話人さんはふつうの家で必要なことをします。ふつうの家で必要なこと、いろいろなことがあると思いますけど、特に食事づくりは大事です。マニュアルには栄養管理が大事と書いてありますけれども、おいしい食事って書くのは忘れられました。けれども、一人ひとり好みの味は違う中で、おいしいということも大変重要な要素だと思うんです。なぜなら、ふつうの暮らしの基本は、くつろいで寝られること、おいしく食べられること、それと心の許せる仲間がいること、さらに、隣近所とのつながりも大事です。

最近20人もの定員の建物がいくつもあるグループホームができたと聞きました。でもこれはもうグループホームではありませんね。当初は全くそんなグループホームができるなんて想像もしていませんでした。この20人ものグループホームというのは、今は名前がそうついているのかもしれませんが、地域生活というものの意味をはき違えていると私は思います。事業者も、行政も、考え直すべきだというふうに思っています。理念というより常識が間違っていく時代が来るとしたら、それが一番怖いことなんじゃないかなというふうに思います。』

こちら、中澤さんが残してくださったメッセージになります。

『(前略) 障害者が長く管理されてきた歴史に鈍感になってはいけません。ふつうの暮らしがしたいという本人の願いが基本です。福祉職員は、その専門性で理念を構築すべきです。専門性で難しければ、もし自分が入居者ならどう感じるか、自分に当てはめて考えることはできるでしょう。(中略) 福祉従事者に期待します。多くの本人の声を聞いてください。・・・福祉とはそもそも何だったのか、熱く論議してください。巻き込み語り合い、みんなで時代を創って欲しいのです。少人数と管理性の排除はグループホームの“命”です。“命”は大切に守らねばなりません。行政も現場も、この点を共通理解し、それぞれの役割を果たせば、後は時間をかけてその質を高める努力をすれば確かな道がたどれます。障害を持つという理由で願いが切り捨てられる理不尽を、決して許さないという覚悟が大切です (後略)。』

近年、グループホームの数は飛躍的に増えてきていますが、このような理念を大事にしなければいけないと思います。また、次のようにも語られています。

『グループホームは当初、4～5人での暮らしへの支援という考え方でした。が、「当たり前暮らし」という建前から考えると変です。人は縁もゆかりもない数人のグループで暮らすのが当たり前ではないからです。そこでゆき着いたのは「暮らしの基本は世帯もしくは個人」という当然のことでした。』

これは、制度を創られる時から、目指すべき所は利用者さんが望む暮らしの実現にあるということを考えられてグループホーム制度を創られたということです。グループホームをやることや運営することを目的にはいけません。あくまでも利用者さんの普通の暮らし(望む暮らし)を実現するための手段なのです。

グループホーム学会は、今後もこのような中澤さんの想いをしっかりと大事にしながら、障害を持っていても普通に暮らせる社会の実現に向けて活動していきたいと思います。

中澤健さんが天国で安らかに眠りにつかれますよう、心からお祈りいたします。

オンライン大会座談会の様子より

